ポール・ワイス哲学の多元論的基底についてのスポーツ哲学の一考察†

第1部 ワイスにおける一と多の問題の成立と先行理論の批判

片岡 暁 夫**

1. 序 論

1.1 研究の目的

ポール・ワイスの哲学の多元論的な基底を検討し、彼のスポーツ哲学との関連を求めることが本小論の目的である。しかしながら、彼の膨大な著作の全体についてその基底を明らかにすることは本小論の範囲にはおさまりきれない。そこで、彼の初期の代表的な著作とされる *Modes of Being* (以下MBと略す)¹⁾ についてこの基底を検討するという限界内において上記の前半の目的を達成する。さらに、この作業のうち「ワイスにおける一と多の問題の成立と先行理論の批判」を第1部の研究課題とし、「ワイスにおける一と多の問題の解決とそのスポーツ哲学への関係」を第2部の研究課題とする。

そしてそこから得られた結果について体育およびスポーツ哲学の観点からその意義を考察するのが第3部の研究課題である。

1.2 研究の方法

MBの記述を解釈するとともに、若干の考察を加える。そこから引き出された基本命題から演繹的にスポーツ哲学との関連を考察するのは第2部以下の予定である。

1.3 先行研究の概観

MBについて T. Krettek は「MBは全ワイス

軍団のための形而上学的基礎を与える」²⁾と位置づけ、また G. K. Plochmann は「MBはポール・ワイスの仕事の2つの局面を分ける分岐点となる著書と呼べ、そのなかで彼は莊重体での形而上学的思索を行う」³⁾と批評している。それとともに世間一般の評として、MBは抽象的にすぎ、ブラッドリーがヘーゲルの論理学原論を批評した言葉「血の通わぬ範疇のバレ・ダンス」を思い出させると述べ、MB以後の作品がこの抽象性ゆえに不足した経験、芸術的創造、衝動、宗教的畏怖、比喩的思考と表現などを補いMBとの関連をはかるものになったと述べている⁴⁾。MBが抽象的かつ難解であるということはワイス自身が承知していたことであり、それ以後の作品でそれを補うことを部分的な目的としていたといっていよいであろう。プロッチマンは「ワイスの最初の数冊の著書におけるたいへん一般的な扱いはこの経験からの逃避ではなくて、むしろ、もう1つの道からそれに到達しかつ理解する企てであった」⁵⁾と結論づけている。P. Miller はワイスの哲学がソクラテス、アリストテレス、デカルトの常識の中心性の系譜に連なり、「経験、思考、生活、そして行為の譲り渡すことのできない前提への探究である」とし、「それがどのようなものになろうとも、哲学は生きていくための哲学であり続けなければならない」⁶⁾と特徴づけている。R. C. Neville は「MBは20世紀における体系的哲学書のなかで最も強力であると十分に言えよう。その力を幾つかの源泉から引き出している。最もはっきりした源泉はその一と多の問題に対するワイスの解決に表明される体系性にある。彼の解決はアメリカの多元論者のコミュニ

† A sport philosophical study of pluralistic basis of the philosophy of Paul Weiss (I): Weiss's formation of the One and Many Problem and his criticisms of the precedent studies, by Akio KATAOKA (University of Tsukuba).

** 筑波大学

ティーが生みだした形而上学的多元論の最も説得力ある防御である」⁷⁾と批評している。

本研究の中心問題である「一と多」の問題は哲学の中心問題であるから、それを検討すること自体が哲学の全体を検討することになるといっても過言ではない。しかし、ワイスのMBの議論に関連するところで範囲をとればその意義がある程度明確になるであろう。このことについて、R. J. Bernsteinが述べていることを概観する。

「一と多の問題は西洋哲学において最古のかつ最も執拗な主題であるし、東洋においても負けず劣らず中心的な問題であるように思われる。」⁸⁾この言葉は、この問題の重要性を的確に表現するものであるが、バーンスタインが上げる哲学者たち、つまり、この問題に取り組んだ人々を例示してみると、一層問題の重要性が理解できるのである。パルメニデス、ヘラクレイトス、プラトン、プロチノス、デカルト、カントなどがそうであり、意義のある凡ての哲学において一と多の問題の解答は中心に位置してきたという。近代でこの問題に取り組んだ最大の人物がヘーゲルであり、ワイスは非常にヘーゲルに近いとともに非常に離れていると評している。

一と多の問題はバーンスタインによれば単に思弁的思考、形而上学、あるいは存在論の関心事であるばかりでなく、倫理学、社会哲学、政治哲学の中心問題でもあるという。この問題についてどのような立場を取るかが実践的に重要な影響を及ぼすというのである。

この問題は、20世紀の新しい哲学運動にとっても様々な形で影響しているという。フッサールに対して超越的自我の複数性が在りうるかどうかを尋ねることによって忽ちこの問題に出会うのであるし、ハイデッガーが同一性と差異性に関心を持っていたのは明らかであるという⁹⁾。新しい形を取ってデリダのdifference and differanceの遊戯的变化という概念にもこの問題が現れているという。あるいはヴィトゲン

シュタインの家族類似(family resemblance)の概念もこの問題に関わるという¹⁰⁾。

ワイスはこの問題を一貫して追究し続けて来た。彼の師ホワイトヘッドとの理論的な分かれば、この問題についての相違にあるといわれる。つまりホワイトヘッドのみならず過程重視の哲学者、ベルグソン、デューイ、ジェームスらに対しても共通するより根本的な批判の観点をワイスは見い出しているといわれる¹¹⁾。

以上のような意味において、とくにワイスのスポーツ哲学との関連において一と多の問題がこれまで我が国の体育哲学、あるいは哲学分野において検討されてこなかったのが、重要かつ意義のある課題であり、本研究を行う必要があると考える。

2. MBの概観

2.1 MBの構成

MBの構成は3部からなる。第1部は「4つの様態」(The four modes)、第2部は「否定的研究過程」(The negative route)、第3部は「連帯せる諸様態」(The modes together)である。第1部においては基本的な4つの存在の様態が分析されるのに対して、第2部では、第1部で得られた命題に否定命題を加えて考察がなされる。それは例えば次のような構成である。第1部の命題様式: An actuality is a being in space., 第2部の命題様式: An actuality is a being in space. Otherwise it could not be encountered., そしてこの付加命題を手掛かりに典型的な反論が述べられ、さらにそれが乗り越えられ、第1部の命題が確証されるという形式を持っている。そして第3部では、4つの存在様態が宇宙の構成要素で有りうるための連帯の論理が展開されている。本小論では序論部および第3部を中心として検討する。なお第1部の目次を整理したものが表1である。

この表から理解されるように、「現成」では

表 1. MBの内容

1. 現成	2. 理想	3. 実存	4. 神
1. 現成の不完全性	1. 可能性	1. 実存の性質	1. はじめに
2. 基本的現成の課題	2. 善の傾向性	2. 実存の弁別性	2. 神学的始まり
3. 現成の活動	3. 権利と権力	3. 過去	3. 宇宙論的關係
4. 因果関係	4. 法律	4. 創造的企画	4. 神の基本的証明
5. 人間性	5. 政治を超えて	5. 歴史	5. 神と他の様態
6. 知識	6. 理想と他の様態	6. 歴史を超えて	6. 宗教
7. 意味と思考		7. 実存と他の様態	
8. 推論			
9. 基本的範疇			
10. 倫理的生活			

データとして人間が中心に置かれる。「理想」ではデータとしての善が中心概念であろう。「実存」ではデータとしての歴史に強調がみられる。そして「神」ではデータとしての宗教が中心に置かれる¹²⁾。

2.2 MBの研究目的・方法・内容の概観

2.2.1 包括的視点の必要

MBは、事物の凡てを包み込む視点を作り出すことを目的として研究されている。このような意味で、科学者の立場とは異なるし、また、部分的な焦点を持つ多くの現代哲学者の研究とも異なる。しかし、このような包括的な企ては、可能であるかどうかという問題がある。それについてワイズはそのような企てが可能かどうかではなくて、必要か不必要かという観点に立って論じている。共同作業によって1つのビジョンを作り出すのではなくて、個人が知力の限りをつくしてこのような企てをなすことの必要性和使命を主張している。「他の学問領域がいかに信頼できるのかを知るためには、人はそれらの学問が自らについて報告するより以上の何かを知らなければならない。」¹³⁾ 諸科学領域の知識を信用しうるかどうかの判断に際して、利用者は、科学者が述べることを丸ごと信じるので

はなくそれ以上のことを知っていなければならないのであるという。ここに諸科学を越える哲学の課題をワイズがみている。

2.2.2 知識の多様性とその統一

物理学で知識と呼ぶものと歴史学で知識と名付けるものとは同じものではないとワイズは言う。なぜなら知識に至る道程も方法も異なるからであるという。この諸知識間の統一が必要とされ、諸知識に共通の「原理」、「範疇」、「価値」を求めることになる。

我々がなんらかの仕方であらゆる学問の外側に立つことができない限り、そして我々がなんらかの仕方各学問に共通な原理、範疇、価値を用いるのでない限り、各学問の枠のなかでなす主張をさえも、権威を持って判決を下すことは望み得ない。またそれゆえ我々はその結果が単一の調和の取れた知識体系の一部を形成するかどうかさえも確信が持たなくなるのである¹⁴⁾。

2.2.3 分析哲学の批判と全体把握の使命性

知識統一の企ては歴史的には分析哲学者が挑戦した課題である。彼らは諸科学の構造、手続

き、意味、文法を検討し多くの業績を上げたが、結局は特殊な専門家に墮してしまって、諸科学の知識を包括することはできなかったとされる。言い換えれば、分析哲学は、知識の包括に方法論的に不適切であったということである。彼らの方法は手続きにおいては精緻を極め、明確さ、精密さ、徹底性を追究したが、構造、手続き、意味、文法に偏り、科学者の意図、言語および言語使用、そして彼らの実践を明確にするという仕事に自らを限定し、科学者の前提、方法、主張、吟味の方法、研究結果をすでに承認されたものとして受け取らざるを得なかったところに限界をみているのである。ワイスは彼らがまず以てなすべき基本的探究をしなかったと批判するのである。つまり科学に対して価値的およびその結果に対する評価の観点をも含まなければすべてを包括することはできないというのがワイスの批判の要点である。全体を前提にする時、欠けているところが明確にみえてくるのであり、全体の包括がワイスの論理構築の出発点であり、条件となっていることがわかる。分析哲学の人々は知識を位置づける哲学プロパーの世界観において欠けていたのである。このことについてワイスは次のように述べ、価値評価を含む全体についての知識の産出が必要であるという。

我々は様々な手続きがいかに健全であるかを知らなければならないばかりでなく、異なる学問の異なる結果が包括的説明のなかでどんな地位を占められるかを知らなければならない。しかしそうすると、全体について実在が知られなければならない¹⁵⁾。

全体的視野を欠いたり無視することは、自分の根拠を失うことであり、また、目的を取り違え、基本の吟味を怠ることであるとワイスはいうのである。確かに、全体無くして部分は有り得ないのであるから、ワイスのいうことは正しいし、現代の科学技術のもたらした地球規模の

諸問題を考えれば価値評価が科学に対してなされなければならないことは理解されよう。「手段と同様、究極目的も批判的に検討されなければならない」¹⁶⁾のである。科学的知識の産出はWert Freiでなければならぬと言った社会科学者のウェーバーの言葉は有名であるが、それと対照される。哲学者は多くの科学者のなかの1人であることに満足してはならず、彼らにとっての1人でなければならないというのがワイスの使命感なのである。

2.2.4 全体把握の中心点としての人間研究

このような使命を果たすためにすべての科学的知識を個人が把握するということは不可能である。この不可能な条件をいかに回避して全体の把握に至るかが問題である。ワイスは「人間」の概念にこれを委ねる。

もし我々が人間であるとはどんなことかを知るなら、その時にのみ、我々は人間の性質についての協調的研究に従事できる。もし我々が人間であるとはどんなことかを知るなら、その時にのみ、医師、生物学者、心理学者、人類学者その他の互いに対立する議論を比較判断することができる¹⁷⁾。

人間の把握に基づいて、存在し、探究し、理解するということが何であるかを知ることができる。そして同一主題の多側面として科学的な諸知識を位置づけ、総合できるというのである。特殊化する前に全体の把握が必要であり、たとえ不完全であってもそれに挑戦すべきであるというのがワイスの立場なのである。またここに価値評価の意義も存するといえよう。「我々が望むと望まざるとに関わらず、我々はコスモス的に考えねばならないし、考えるのである。」¹⁸⁾

2.2.5 ワイスの現代把握と現代哲学における位置

過去の大哲学者たちのように全体を包括する

仕事を使命としているという点で、ワイズが現代哲学者のなかで、特異な位置を与えられてよいことがわかる。彼らの使命を受け継ぐのであるが、しかし過去の大哲学者たちの信じられないような誤りの累積は、彼に彼らとは異なった仕方では世界を理解することを要求する。そしてこれは可能であるというのである¹⁹⁾。ここに哲学史的基礎を持った前進というものがあるのであり、さらに現代の思想、すなわち現代科学、現代詩、現代音楽、現代絵画、最近の分析論理および象徴論理などの思想の進歩が思索の助けとなるのである。

ワイズは現代を新しい精神の芽生えが生じている時代であり、基礎論の再検討に入った時期であると捉える。このことによって、過去の見え方とは全く異なる世界が現れるという。MBの課題の1つはこの新哲学の概観をすることにある²⁰⁾。このMBに至るまでにワイズは3冊の研究書を発表しているが、その過程でみてきたものがこの新哲学である。その第1冊は、知識と自然の本質を扱った*Reality*²¹⁾である。知識と自然の相互依存について、言い換えれば認識論と存在論の哲学的循環について明らかにしたものであり、最小の前提から論を立てたところに特色がある。認識と存在を個別に切りはなすのではなく関係的に捉えていることが重要である。哲学はサークルを描くのであり、部分是不完全なものとして現れるのである。部分が完全であるためには凡ての他者へと志向し他者のために行為しなければならないという。これが彼の関係把握の要点である²²⁾。

2.2.6 個別存在の同時代性の問題－共有するコスモスの成立の問題

関係の要点たるそれぞれの個人からの諸他者への志向と行為それぞれは個人の行為目的をもち、1人1人独自の目的を持つということになる。個人のリズムと個人の時間からなる未来へ向かうばらばらな他者が関係することから構成される世界となる。このような意味で同時代性

は成立しないということになる。各人は一個の立場から世界と対峙する。各人はばらばらな方向性を持つ。諸個人間の連結は必然的ではない。この個人は私的な時間を持つ。この時間はそれぞれのリズム、区分、ペースを持つ。他者とかならずしも時間を共有しない。いかにして他者の時間と咬み合ってくるのか。いかにして単一の時間が成立し、凡ての事物が一緒に住み込む1つのコスモスがあるのかという理由が要求される。事物はばらばらに行為することになる。特徴を共通させることはあるし、集合を構成することがあり、その観点から取り扱うことはできるが、それで同じように行為するということにはならない。事物は共通特徴に従って行為はしないのである。これらの特徴は単一の対象からの切り離された抽象であり、そこから由来するので、時間的一致のなかに同時代の存在を保持することはできないのである。個人の時間と共通時間あるいは普遍時間の関係が問題となる。なぜ共通時間が成立するのか。この問題に取り組んだ者として、①アリストテレスは世界の外部に神を設定し、それが同時代を作り出すとした；②ホワイトヘッドはライブニッツとともに神の設定せる予定調和を持ち出した。ばらばらな事物の動きも結局は調和に至るとするのである；③カントは時間に2つの側面を区別した。すなわち1つは私的あるいは理念的な時間であり、もう1つは公的あるいは実際の時間である。そしてこの両者がなんらかの仕方と同じ区分とペースで経過すると仮定した。アリストテレスとカントは個別存在の同時代性の問題を空間的宇宙論的仮定をもって解決し、ホワイトヘッドとライブニッツは神学的な工夫でこれを解決したが彼らは解決の手段を世界の外に求めているとワイズは批判するのである²³⁾。

ワイズは、何をしようとも共通時間のなかにいるという事実があると主張する。ここが彼の出発点なのである。さもなければ、我々に作用し、我々と共存し、我々を限定し不完全とさせるものは存在しないことになるというので

ある。世界の作用の根源は個体にあり、彼らが来るべき未来の共通形式を決める²⁴⁾。

事物はいろいろな集合の成員であるが、それは彼らがたまたまある特徴を分有しているからではなくて、彼らが皆同じ目的を持っているからである²⁵⁾。

すなわち、目的の共有が統合をもたらす。例えば、人間が動物集合の成員であるのは動物の性質を分有するからではなくて、動物という目的を共有するからであるというのがワイスの論理学なのである。人間の集合があれば、それはホモ・サピエンスというような共通特徴によって集合とせしめられるのではなく、その使命や生ける目的によって人間という集合となるという意味なのである。ここにワイスの優れて行為論的な哲学が伺えるのである。これは条件付ながらワイスとプラトンの類似性を示すところである。もしプラトンの仮説である「完全のイデアはそれ自体完全である」ということ、「善のイデアはそれ自体事物の最善である」という観点を避けるならば、あらゆる存在の不可避な目的を「善なるもの」(the Good)という称号によって呼ぶことに賛成できるとワイスはいう²⁶⁾。そしてこのような意味の拡大を得た善の本性と善の必要の承認は、因果、推論、行為の本質を理解する新しい方法を与え、これらについての考え方を実際に変化させるという²⁷⁾。

因果についていえば、まず、あらゆる生起が同時に限定されかつ自由であると捉えられる。生起は現在のなかに生起するのであるが、まだ未来であるものによって境界のなかに閉じ込められているという。推論についていえば、芸術的創造と論理的演繹との分離、歴史理論と物理学理論との分裂の問題が避けられるという。行為についていえば、あらゆる行為と思考は現在に起こり、具体的で、うつろいゆくものであるが、そのまったき具体性においては予測できないが、現在の現実化しているものによって結果

を残されるゆえに予測可能であるということになる。芸術と歴史、論理と物理はともに非予測的側面と予測的側面を持つが、前のペアーは非予測的側面を強調し、後のペアーは予測的側面を強調するとされる。そして4者は出発点、媒体、目的、過程においてそれぞれ異なるが、同一の基本法則と原理を現すのであるという²⁸⁾。

2.2.7 目的の論理と自由

この考え方により、善なるものと名付けられた共通目的が同時代性を連結する。個人は個人的な仕方では知らないうちに共通の目的を達成するということになる。この共通目的について論じたのが*Nature and man*²⁹⁾である。この著書で彼は共通目的の不可欠性を強調した。それは個物の存在と不可分であるという³⁰⁾。*Nature and Man*において、人間が自然の統合的な一部であるばかりでなく、進化の産物でもあるということが強調された。生命の無い存在から生命が発生し、そしてそこから人間が生まれるという3段階を区別し、その根拠を、時たま起こる不満足を超える存在の側の成功戦略の結果が積みかさなってきたものであると説明する。つまり、諸存在は重大な障害を克服するために、そして敗北と全滅を避けるために方向を変え、新しい適切な目的に向かい、それによって性質と未来性において変形せるものとなってゆくのであるという³¹⁾。このような論理は現代の人類の置かれた状況において示唆に富んだ理論であるといえよう。つまり、旧来の人類の目的でゆきずまった今日、新しい目的へと方向変換し、人類を超えるものへと進化していくであろう、と考えられるのである。ワイスは基本的に悲観主義者ではないのである。このような意味でワイスの師であるホワイトヘッドやフランスの哲学者ベルグソンと同様、人間を含むコスモス的な創造的進化について考察していることがわかる。そして、この書の結論として「人間が他のあらゆる存在と根本的に異なる点は、一貫した自己を所有することである」³²⁾と述べ、

彼の個人重視の思想、言い換えれば、実存主義的な傾向を示し、彼がニーチェ以後の現代哲学者であることを明らかにしている。この自己 (the self) のみが、身体およびその他の世界に対して外側に立ち、単一の凡てを包み込む目的である「善なるもの」の実現に持続的に関わるのである。人間は自己を持つゆえに、自己同定者であり、自己訓練ができ、自己批判ができる存在である。これは人間の特権であり、他の存在が及ばぬところである。

2.2.8 人間における善の当為とその失敗の必然のパラドックス

第3の著作 *Man's Freedom*³³⁾ においてワイズはさらに彼の理論を補完する。「善なるもの」は人間によって求められ、追求されるが、大部分は知らず知らずの内にそれがなされる。しかしその場合、人間に固有の自由が作用しているという事実が強調されるのである。この自由の概念は、原形として、選好 (preference)、選択 (choice)、意志 (will) という自由と関係の深い3つの概念を用いて論じられる。これらは、凡てを包み込む善なるものを実現すべく、人間が自由に用いて努力するところの人間的基本手段 (agencies) とされるのである。

人間は「善」をその最も完全な形で実現するし、実現しようとすべきであり、あらゆる存在に対して「善」をなすことが人間の課題であり、それ以外には何もないという。しかし人間は有限であり、弱く、無知であり、不可避免的になすべきことをするのに失敗する。このような意味で人間は罪のある動物である。この善の追求と不達成のパラドックスを人間の義務の範囲を狭めることによって克服することはできないのであり、責任のいかなる領域も完全に人間が満たせるほど小さくない。例えば、1人の他者に対してだけでもなすべき凡てをなしたものは1人もいないのであり、さらには、自分自身に対してさえもこれはできないし、していない。人間は弱いのである。能力を改善したとしても、常

に有限であり、十分な義務を果たすには不足する存在なのである。ワイズはこのパラドックスに挑戦した。このことから彼は、それまでの考察を一部に取り込むもっと広い4次元の全体を導いたのである³⁴⁾。

2.2.9 4次元の構造とその解釈の試み

これら4次元の本質の示唆はすでに *Reality* その他においてみられるが、倫理の研究をして、上のパラドックスの力を十分に理解した後に明確になったものである。このパラドックスは3次元以下ではどうしても解決しないということを発見したという。存在の解明には4つの明確な実在を区別しなければならなかったのである。すなわち「現成」(Actuality)、「理想」(Ideality)、「実存」(Existence)、そして「神」(God)³⁵⁾ と命名されるものであった。これら4つはそれらの統合性と来歴を持った究極で還元不可能な存在の様態である。これらが一体となってコスモスを究め尽くすのである。コスモスの理解のために4つの実在からなる1つのシステムを要求するのであり、それは、それぞれが同様に基本的であり、説明力があり、そして不完全であると認められるものからなる1つのシステムなのである。

不完全にして義務を完全に充足することが不可能な人間存在が、完全へと義務づけられているというパラドックスは、それぞれ不完全な4実在からなる1つの相互関係的な完全システムにおいて解決されたのである。ここに彼のオリジナリティがある。そして、これら4つの実在の本質を明らかにし、それらが相互に影響しあう仕方を把握することがMBの課題なのである。この4つの実在はなぜ必要なのか。

まず、それ自身では不完全なものの1つである「現成」(Actuality)が論理の出発点となる。「現成」とは空間と時間のなかに現れる有限存在を意味する。それは生成しそして滅びる。この有限存在が完成するには己にふさわしい目的を実現するように努めなければならないと考

えられる。この主張は先述の善の概念に関係する。そしてワイスのスポーツ哲学で身体的卓越性の追求が基本概念であり、スポーツ哲学がとくに現成に関わると述べたことは、これに対応するといえよう。人間はこの現成の具体例である。人々が卓越を求める道は様々であるが、スポーツもその代表的な道の1つなのである。未来の単一で共通の「善」に導かれて（必ずしも明確な意識を伴わないが）、それぞれが個別の道を通して目的の実現に近づくのである。人間はこの「善」にその十全なる普遍的形式において焦点づけることができる唯一の「現成」であるゆえに、人間のみが彼自身および他の存在のなかに「善」を実現することを求めることができる。しかし人間は、個人ではその「善」を十分に正当に扱えず、それは存在する凡てとともに協力することによって初めて可能であるという。彼がなすべき凡てをできるのは、ただ、「善」の名代として、他の凡てのものによってなされたことを凡て自分のものとして引き受ける時である。この観察により、「現成」が行為する「エネルギー場としての実存」(Existence as energizing field)を前提とすることになる。つまり、他の凡てが行為している場を引き受けることが条件となるからである。この「現成」の行為は「善」に終結し、そして人間の崇高な面(the devine)に一時的な尊厳を与える。このことから、凡ての「現成」と「善」が一緒になり得る統合する実在を前提し、それを「神」(God)と命名している。そしてそのなかに「実存」が弁別可能であるために必要とする統一的本質(unitary essence)を見い出す。「実存」と「神」は、勿論また「善」によって前提される。これらはそれと異なっているが必要な仕方では支えている³⁶⁾。

以上の難解な論理を比喩的に解釈してみよう。大工が家を建てるとする。まず大工がおり、家の材料がある。これが「現成」である。これらは地球のどこかのエネルギー場にて、みずからもエネルギーを吸収し、エネルギーを発する

個別のものである。これが「実存」である。そして良い家という概念が意識的あるいは無意識的に存在し（なぜならば作業過程で意識に昇ってきて選択される好みなどがあり、とくに芸術作品の制作などではこれが顕著にあらわれる。そして個人を介してヘーゲルのような客観的理性に類似した個人を超越した理念あるいは文化・文明が作用し）、作業を指導する。これが「理想」＝未来のモードである。そして実際に材料を連結し、実現に至らせる技術（単に人間の持つ技術を超えて神の技あるいは自然の技というような意味に拡大されなければならない、つまり、人間の技術が出てくるそもその根源を含む広い概念）というものがある。これが「神」とワイスが呼ぶものである。このような比喩はワイスの宇宙規模の理論を矮小化するものであるが、第1段階としての理解の補助となろう。ワイスはこれらの関係について次のようにいう。

「現成」、「理想」、「実存」、そして「神」は相互にデータとなる。それぞれが残りの3つに対する関係において演ずべき1つの役割を持つ。そして1つのために他の3つがそれぞれ1つの役割を引き受けることを必要化する。さらに、凡てが相互に融合し、かつ、限定する。それぞれが異なった機能を持ち得るのは、ただ、それぞれが還元不可能なそれ自身の確定的な存在を持つからであり、その存在の外側とその存在に対立して、その他3つがあるからである。それぞれは残りの3者に対して明瞭な展開と他3者と関わる特徴的な1つの過程を所有するものとして対立し、外立するのである。「現成」は周囲に存在する凡てと完全に適合すべく作用を起こす（努力する）；「理想」は凡てを包み込むように作用する（努力する）；「実存」は他の凡てから自身を切り離すように永続的な努力にたずさわる；「神」はあらゆる場所に現れているものを統合すべく努力する。それぞれが他の3者を助けかつ抑制し、4者がそれぞれ1

つだけでは不可能な、より大きな成功を達成することを可能にするとともに、決して完全な成功を達成できないように妨げる。4者のどれ1つとしてそれが現在居る“たくさんの存在物 (beings) のうちの1つにすぎない所”を超えて進むことは決してできない。存在 (being) は様々にかつ悉皆的に4つの相互に組み合った還元不可能な様態のなかに示される³⁷⁾。

この引用を視覚的空間的に解釈すれば、世界は個々のまとまりある存在物から成っている。例えば、1つ1つの星が空にあり、1つ1つの石ころがあり、1本1本の木や草があり、動物が個体としており、人が1人1人いるというような空間の風景である。これらの個々の存在物は、「現成」である現状の姿であり、周囲の存在物と関わって適切な所に位置している。例えば、水は低きにあり、池や海をなしている。人は適材適所に自ずと位置している。そのようにして、「現成」は永遠に「現成」を続けるのであるが、その様相をみれば、適材適所に移動・変化しているのである。これはいわば映画をみている観客の立場に我々がいるのである。スクリーンの裏には実体がない。しかしワイスの *adumbration* という知覚についての概念を補うことで実体が把握できるのである³⁸⁾。

時間の軸からみると、未来があり、そこにまだ実現していないゆえに不完全な構想がある。しかし確実に、現在未来へ向かって行き、構想は過去を参照しながらより完全なものへと描きなおされて行く。「理想」とは書きなおされ、凡てを包みこむように成長するものなのであるが、永遠に未来にある。川の流れをなす水の未来は海をなすことである。しかし今のところ海をなしてはいない。子供の未来は成人である。どのような成人になるか、今のところ狭いイメージしかわからない。成長とともに理想は詳しくなり、人間や自然を取り込んだものになっていく。

「実存」概念をエネルギーの軸からみると、世界にはいろいろなエネルギーの焦点がある。この焦点は外からのエネルギーを吸収し、自己を維持しようとする。石は割られることに抵抗する。作用された力を吸収し無化しようとするが、耐えきれなければ割れる。そして割れたものもさらに同じことを繰り返す。つまり凝集力を持った存在となっている。原子核の破壊は膨大なエネルギーを排出する。これは原子核が膨大なエネルギーの焦点であるということを意味する。このコスモスにあるものは、崩壊や破壊に永遠に抵抗し、個物であろうとする。

「神」の概念を観照性 (appreciation) の軸からみると、「現れているものを統合する努力」すなわち、ばらばらなものを1つの世界に統合しようとする意図とは、コスモスの光、あるいはコスモスにおける観照性の存在、あるいは凡てを受け入れる受容性といった根拠によって例証されるものであろう。個々の存在物はそのなかで配置される側面を必然的に持っている。ニュートンは神の意図や証拠を求めて物理学にいたったといわれる。近代の第1世代の科学者は神を必要とする科学者であった。これは逆転させれば、神の観照的意図に相当するものを探求したということになる。この光はコスモスを照らしているのであり、人間の観照力はコスモスの観照性の部分的反映といってもよいであろう。これをワイスは「神」という言葉で表現したのではなかろうか。人間の部分的観照力は技術として現れ、この暗い技術は19世紀において科学技術となり、現代にいたってその限界が論じられつつある。この課題は「現れているものを統合すべく努力する」という意味で、地球規模で現れている諸問題を統合すべく人間に努力が要請されていると意識されるようになってきたのであり、超科学技術の時代が幕を開けたと解釈することもできるのである。しかし、これも1つの解釈にすぎない。

以上、4つの実在について第2の解釈からみてきたが、いずれも静止的な概念ではなくて動

的な内容を持つ概念であり、存在の運動を捉えるものであることに注目できるのである。しかし、その全貌を捉えたのでは全くない。単に外観したのみである。このような意味で、さらに理解が補われなければならない。この方法についてワイスは「弁証法は基本的な方法であるが、しかしまた共感とイマジネーション、直接的な出会いと抽象の使用も存在する」と述べている³⁹⁾。つまり論理的に理解するだけでなく、内容に共感する感受性と想像力、具体的な経験と抽象化といった総合的な人間の能力を駆使することによって理解されなければならないのである。このような意味において本書はひからびた論理の妄想ではないと主張しているといえよう。そして、誤解の可能性について次のように注意点を述べている。

それぞれの存在の様態はそれ自身であることができるためには他の3つを必要とするのである。コスモスは、4つの存在の様態が1つに組み合った全体である。コスモスのなかで他の3つが有効で、かつ、コスモスとは別のものでなければ、どの1つも存在し得ない。これらに与えた名称は時に間違った方向へと理解を導くであろう。なぜなら、このアイディアは幾分新しいのであるが、言葉はむしろ古いからである。これらの様態の機能の幾つかは間違っただけで描きだされていることもありうる。なぜなら、このコスモスの凡ての部分が個人の努力で等しく明確な焦点を結ぶわけではないからである。この見解が次第に開かれていく仕方をみれば、そして事物と人間に対する西欧の伝統に照らしてみれば、本書で不当に大きな強調が「現成」になされている可能性がある。ここで意図されていることの理解の道で最大の障害は、多分、著者及びおそらく読者の傾向、すなわち、実在、あるいは「理想」、「実存」、「神」の機能を最小にする傾向であろう。完全性と公平性はこの凡ての4つの様態を等しく基本的で、等しく事実で、

等しく欠くことができないものとして限定することを要求する⁴⁰⁾。

このようなことは感覚器官に頼って生活している人間には凡てあてはまる傾向である。感覚で捉えられるものが「現成」なのであるから、感覚を超えた実在を捉えるのは容易ではないのであるし、従って難解になるのである。

3. 様態の概念

3.1 辞書・事典における様態の概念

MBの鍵となる概念である「様態」について検討しておかなければならない。

英語のmodeは2種の語であるが、第1のものが本研究に関係する。第1のmodeは、①やり方、ふるまい方、方法、方式、流儀；②（物の存在や行動の）表われ方、あり方、形態；③[哲学] (1)事物またはその特質・属性の持っている現象・形・あり方、(2)スピノザ哲学で、神の非本質的な諸性質の1つで、他の様態と一緒にになっているもの（以下略）である。語源はラテン語のmod(us)=mannerである。methodと類義語である。methodは決まった手順や方式を表わし、通例一定の、確立された、論理的な、あるいは体系的な計画に従うものをいう。modeはより形式ばった語で、何かをする習慣的なあるいは特徴的なやり方を意味する⁴¹⁾。

以上のような意味で属性と様態の関係は、人間と運動の関係に似ている。同一人が色々な運動において様々な姿で現れる。このような原形が概念のモデルとして潜んでいるといえるかもしれない。本質ないし属性という概念も、人間がそれぞれ個人性を持っており、同一人でありつづける経験をもとに理解されうるのであり、それが自己の振る舞いや歴史と比較されて様態の概念も必然的に理解されるのである。もし、この、人間の同一性がなければ、事物の本質の把握という要求は人間から発せられなかったであろうし、従って、様態という概念も区別され

なかったに違いない。見極めや注目などは、運動のなかになんらかの不動の同一性を外の世界に求めている作用であるとみることができる。これも、己の同一性を足場として外界に投射されたものであるということができようであろう。狩人は、獲物の運動を追って獲物の同一性を確保しようとする。そして逃げる動物はいろいろな様態を示すのである。

日本語では、様態とは、「①物の存在や行動のさま、状態、様相。②デカルト・スピノザ以来与えられた独特な意味では、実体の変化してゆくかきその形態、従って実体の非本質的な状態のこと。偶有性」⁴²⁾とある。

この解説も上記の英語の場合の解釈例によって理解できるであろう。実体の原形イメージは自己同一にある。「汝自身を知れ」という言葉は、実体の属性の最たるものについて知れということになる。そして、様態は偶有的な私の現状である。

哲学事典によると、様態は様、様式、状態ともいい、事物や事象がそれぞれの仕方において在る、すなわちある状態、ある規定性において在る場合、その仕方、状態、規定性のことを指すと説明される⁴³⁾。例えば人間が野球の打席で構える時、打者の状態に置かれ野球のルールによって規定されているわけで、これは彼の一樣態である。属性 (attributum) が事物の本性、本質を意味するのに対して、様態は事物にとって偶然なる偶性に該当するわけであるから、打者であることは彼の本来の姿ではなく、仮の姿にすぎないものとして、彼の本性に対置され、彼は二分されて把握されるのである。以上が様

図1. 基本的語意

図2. デカルトの様態

態の基本概念であるが、その使用法は哲学者によって異なる。このことを図1に示した。

デカルトは感情、意志、判断、欲求を精神の様態とし、位置、形態、運動を物体の様態とした（図2）。スピノザは様態を実体の変容、すなわち唯一実体である神（自然）の属性（思惟と延長）がそれによって特殊な仕方において表現されるところの状態と考えた。したがって凡ての有限の物体、個物は延長属性の様態、凡ての有限の精神、個心は思惟属性の様態であり、両者はともに神そのものの様態となる⁴⁴⁾。桂寿一はスピノザの様態の概念について次のように述べている。

スコラにおいても「様態」にあたるmodusは用いられたが、それは主として様式的なことがらを指し、必ずしも「実在的」な事物の状態を指すわけではなかった。従ってスピノザの用法はある意味では、これと逆になるといってよいであろう。・・・彼の場合の「様態」はある意味では、「実在的な」事物、すなわち実体の変状を指しているのである。スピノザのこうした用法が専らデカルトから来ていることは、認めてよいと考えられる。デカルトは・・・実体が他のものによってその状態を変えられるような場合には「様態」を、実体に内在する本質のごときを指す場合には、「属性」の語を用いるといっているが、厳密に両語を使いわけの意図はなかったように思われる。従って「属性」を神すなわち「能産

図3. スピノザの様態

図4. ロックの様態

的自然」に、「様態」を「所産的自然」に配して、明確にこの両者を区別したのは、いうまでもなくスピノザに固有な用法であるといわなければならない⁴⁵⁾。

以上のようにスピノザは様態の概念について最初の明確な使用者であるといっていよいであろう(図3)。

これらの他、ロックでは様態は、実体、関係の観念とともに複雑観念を構成し、たとえば、1ダースという観念のように、同一の単純観念の結合によって生ずる単純様態と、たとえば美の観念のように人間に喜びを与える色彩と形態という異種の単純観念の結合によって生ずる混合様態とが区別された(図4)。

3.2 スピノザの様態論の批判

様態論の代表的な論者としてスピノザの立場を取り上げている箇所が、すでにワイスの最初の著作*Reality*のなかに出てくる。

このスピノザ的なテーゼは、しかしながら、

その様態の生起の説明が不可能であるという困難に衝突するばかりでなく、我々が常に、これら想定された様態が内部の、具体的で、実質的で、個人的なそれ自身の存在を持つという影響収蔵可能な証拠に対立する。そのような存在者とは別でそれらよりも優れた実在はもっと具体的であらねばならず、そして、少なくとも存在したり、知られたりするためには、存在者の存在に依存し、それらを通して証明されなければならないであろう。その実存を示すためには、我々はまず想定された様態の多数性の必然的実存を証明すべきであり、それからそれらが究極の個体であると呼ぶには十分に具体的でないということ、そしてそれゆえ、かのもっと究極の実在の存在があらかじめ予想されるということを示すコスモロジカルな議論を用いるべきである。そのような証拠はおそらく神学の主題である。我々にとっては、個体が多数あり、それらが相互作用して1つの必然的全体(a necessary totality)を構成するということを知るので充分である。我々が実在的であると呼ぶのは

この全体である。仮に成員が、かの全体〔スピノザの自然〕の部分であるとしても、その部分よりも一層具体的であるはずのその存在は、成員の出現を必要とすることになってしまふであろう。そして、それは成員に1つの共通の地盤を与えうるとしても、成員の個人的行動やあるいは性質を決定しはしないことになるであろう。もしそのような一存在があるとすると、我々のことば「実在」は、もしそれがかの存在を1つの完全かつ必要な全体、すなわち、それと我々自身のユニヴァースが必然的に実存する構成要素となっている全体の一員として捉えることがない限り、あまりにも狭い範囲を持つことになるだろう。我々のユニヴァースがそれ自身の存在を必然的に含む限り、この無視、すなわち、まだ証明されぬもっと実質的な実在を想定することは以下に続くものの妥当性あるいは重要性になんらの効果も及ぼさないに違いない⁴⁶⁾。

この引用から、ワイスがスピノザのモデルでは無理があるといっていることがわかる。ワイスは、彼の議論は神学的な問題を含むものであって哲学にとっては不必要な議論であるというのである。スピノザにとっての究極の神（能産的自然）の概念は、ワイスが個々が相互作用しあう全体を実在と呼ぶことに対応されるのである。そしてこの段階では、様態の概念はスピノザ的な意味で用いられており、スピノザが様態であるという個物や個心が、それ自身の内面の、実質的な、個別の存在を持っているというのである（図5）。ここから、ワイスの個物や個心を含めた1つの具体的全体をまず立ててそ

存 在

図5. ワイスの様態 解釈A

図6. ワイスの様態B（解釈Aの修正）

の様態を分析するというスピノザと逆のモデルが出てきているのではないと思われる。すなわち、個の存在があり、その様態の分析で4次元の実在が引きだされるのであろう。一者を前提にしない論理が求められている。たしかに、ワイス自身が述べているように、*Reality*を著作した時期にはまだMBの構想は意識されていないのであるが、上記の引用にみるごとくすでにMBの発想と共通するところがあるといえるのである。このような意味で、図6のような他とは逆転した論理の筋をたどるとみてよい。従って問題は「一と多」及び「多の連帯性」（togetherness）である。4つの様態の連帯には作用関係が成立しなければならないが、それぞれの様態特有の関係方法が考えられている⁴⁷⁾。各様態は独立しているのであるが、他の3つの様態と相互作用することによってはじめて完成に至るという相互依存関係にあるというのがワイスの着想なのである。

4. 一と多の問題と過去の理論の批判

4.1 一と多の問題の起源

ワイスが多元論であることは明らかである。このことは様態の概念の検討から導かれた。どのような多元論であるか、さらにこの根拠を検討しなければならない。一と多の問題は一元論と根本的多元論の対立によってまず提起される。その要旨をまとめてみる。

4.1.1 一元論の難点

「唯一の実在」というだけでは、プラトンが述べたように⁴⁸⁾、まだ何もいっていないのと同じであると批判する。すなわち、「唯一の実

在がある」ということは、すでに統合 (unity) と存在 (being) の2つのことを述べていることになり、1つのものを認識して判明であるためにはすでに1つになった多 (a Many)⁴⁹⁾に出会っていなければならないのであるというのがワイスの基本的論拠である⁵⁰⁾。

4.1.2 根本的原子論 (radical atomism) の難点

“a Many” が成り立つためには、諸単位 (units) がなければならない。これらの在り方が根本的原子論の在り方であるなら、ばらばらで、相互になんらの関係もない状態になり“a Many” は成り立たないと批判する。つまり、認識可能であるために、共通の一実体が必要となるのである。

上記に述べた2つの批判から生じる矛盾の克服が課題となる。すなわち、一元論の弱点と根本的原子論の弱点の同時克服である。「何も内容がない」という“一”と「ばらばらである」「多」との間に“a Many” が位置する。この問題の分析から次のような派生問題が出される。すなわち、

いかに実体の複数性が連帯しうるか、すなわち、その連帯が事物の総体に順にその起源の組と連帯するようにさせなければならぬ新しい成員を次々に付け加えること、このことなしに連帯しうるかも、一と多の問題の1つである⁵¹⁾。

すなわち「起源となる多数がある」ということは、「一組み」の多数と「存在」とからなる2者をいうことになり、これはさらにこの2者をまとめる新たな「多数」を形成し、さらに「新多数」が「ある」といわざるをえなくなり「新新多数」が成立し、無限の拡大に陥ってしまうのである。これはあらゆる理論につきまとう問題であるという。理論は、なんらかの形で多数の実体を認識せざるを得ないからである。こ

の問題の解決が必要だとワイスはいうのである。

4.2 この問題に対する過去の解決理論の批判

ワイスは代表的な5つの解決理論を取り上げてその長所と短所を整理する。すなわち (A) Synthesis, (B) Concurrence, (C) Self-diremption, (D) Dualism, (E) Identity in differenceである。以下その概略を図を加えながら解釈する。

4.2.1 総合 (Synthesis) 理論の批判

カントとヘーゲルがその代表として上げられ、カントが原形を提出しているとされる⁵²⁾。ワイスはこの理論の難点を4つ上げている。

- (1) 綜合理論は多数の個がなんらかの行為を通して連帯させられると主張する。すると連帯

図7. 総合における作用者の必要

図 8. 総合の機能不足

させるものが前提されていることになる。そして、事実、総合は生ずるので、この前提は、多数に影響する作用者を前提していることになる。かくして無限の循環に陥る(図7)⁵³⁾。

(2) 総合はa Manyからa Oneを生みだす。すなわち“a One from a Many”であって“a One for a Many”ではない。前者はa Manyに対してなんらの影響も及ぼす必然

性がない。したがって総合理論は、a Oneからa Manyへと逆に作用する道a One for a Manyを必要としている（図8）⁵⁴。

(3) 総合はa Manyに乗って展開する. しかし展開以前に, a single Manyを構成しなければならない. もし多数がそれぞればらばらならば, 総合される多数は存在し得ない. 総合の作用が成立するためには前総合 (a prior synthesis) の存在が前提となる. すると総合は不必要になる (図9)⁵⁵⁾.

(4) 総合が成功すると新しい実体を生む. この新実体はもとの a Many と関係する. かくして無限循環が起こり, 総合は常に未完成になる. したがって, まず始めに, 多数の共存性の問題がまず解かれなければ総合は始まらない (図 10)^{5 6)}.

図9. 総合の不必要性

「例えば水素と酸素が化合して水となっても、水素と酸素が無くなるわけではない」

図10. 総合の無限系列

以上が総合理論によるa Oneとa Manyの問題に対する解答の困難点であると指摘されている。カントの理論のように、局外者としての人間を立てるところに難点があるといえよう。

4.2.2 共起 (Concurrence) 理論の批判

ホッブスの国家の起源と統治の正当性の理論にこの原形となる理論が潜んでいたとみている⁵⁷⁾。共起理論は、総合理論の難点を幾分回避している。この理論もa Manyから始まる。しかし総合者を立てることはしない。単に共起の結果として、多数の外の、どこか共通点においてa one (例えば国家)を生み出すとされる。a Oneは派生的で、実体的要素を付け加えるものではない (図11)。この点は長所であるがワイズはこの理論に3つの問題を見出している。

- (1) 共起は偶然か必然かのどちらかで生じる。
偶然の場合、共起が生じるという保証はない。
つまり共通の目的を目指すとは限らない。う

図11. 共起理論の概要

偶然の生起 = 共起が生じるという保証はない = a Manyはa Oneを必要とする → 必然の生起 = 多数が一致して動く必要がある = a Oneがあることになる = 共起不必要

図12. 偶然の生起か、必然の生起か

図13. 共起の矛盾

まくいかないこともありうる。ところがa Manyはa Oneを必要とする。従って、共起は偶然ではあり得ない。だが必然だとすると多数が一致して動かなければならない。それには、a Oneを前提とすることになってしまう。もしa Oneがすでにあれば、共通目的を目指す必要はなくなる (図12)。

- (2) そのa Oneに向かってa Manyが共起するとすれば、このa Oneはa Manyの一部なのかあるいはそれらと別のものなのか。a Manyが目的を目指すことによりa Oneが生まれるとすれば、前者であり、それが目的への目指しをうながすなら後者である。しかし、もしそれが前者なら、それはまだそのa Manyに対してa Oneではない。もし後者なら、それは前提されており、目的目指しの産物ではない (図13)。

- (3) 一点に向かうことにより生み出され、なんらかの仕方ですのa Manyと別であるa Oneは、そのa Manyを支配し、包み込み、連帯の状態にもたさなければならない。a Manyのa Oneなる性質を帯びたもの、そこからa Oneが目的志向を通じて流れ出たもの、は彼らの本来の分離性や自由の有する何物かを、彼らを支配するそのa Oneを構成するために失わなければならない。なぜならばさもなく

図14. 焦点化の問題：

[一元論者の頼る選択肢]

図15. Self-diremption [多数者の自己否定] の原形

れば, そのa Oneは起源のa Manyに加わる新しい1つの実体 (entity) であることになろうからである. そのa Manyはそのa Oneが存するためにそしてしかもそのa Manyに加えられたあるものでないよう自己否定 (self-diremption) の行為に携わらなければならない. しかし自己否定はa Oneとa Manyの問題の異なる解答であり, 第3の解決方法なのである (図14)^{5 8)}.

4.2.3 自己否定 (Self-Diremption) 理論の批判

a Manyから出発する代わりに, a Oneから出発してそこからa Manyが生じると考える方法である. それは自己疎外, 離脱, 外化の過程による. これは一元論者が, 諸実在の複数性を説明するために結局は頼ることになる選択肢で, 代表的思想家としてプロチノスが上げられる

(図15)^{5 9)}. この理論にはa Oneの究極性と力を, そしてある意味ではa Manyがその存在と弁別性についてそれに従いそして依存するという事実を認識する長所があるが, これについてワイズは6つの難点を発見する.

- (1) a Oneはそれのみでは弁別不可能である. 区別を許さないのので, a Manyを含まないものは考えられないし知られない. 自己否定の理論はまず理解できないものから始まる. そして, 全く真でも現実でもないことの肯定で終わる (図16).
- (2) 行為しないa Oneは分割なしに留まる. しかしその場合それは自己否定をしない. a Manyを生むにはa Oneは行為しなければならない. もしそれとその行為が同一であるなら生みだされたa Manyは存在しない. し

a One=区別不許可=弁別不可能 [多を含めぬものは考えられないし知られない] =理解不可能から始める=把握できない原理からの開始=真でも現実でもないものに終わる

図16. 「一」の理解不可能性

行為しない—は分割しない=自己否定の不生起
 行為する—=多を生めるが、

2つの場合がある

- 一と行為が同一・・・多の非存在
- 一と行為が不同一・・・最初から多∴一の非存在

図17. 行為と一の矛盾

図18. 一のゼロ化と前提とする別の一への無限朔行

かしもしれとその行為が別であればすでに a Manyとなっている (図17)。

(3) a Oneはa Manyをそれに対立させることで、a Manyを生みだす。その時a Oneは、a Manyに存在あるいは意味を与えるためにそれ自身を最小化しなければならない。これはその自己否定された存在およびそれが一緒であるa Manyよりももっと実在的であるa Oneを前提することを要求する。それはa Manyのなかのa Oneとなるであろう。かくして循環する (図18)。

(4) そのa Oneは単一の行為あるいは多くの行為に携わる。もし後者ならば、a Manyが発生される前にはっきりした複数性がなければならぬという矛盾に陥る。もし前者であるなら、発生最初の行為の産物が従うものを発生し段階的に足場をなして波及しない限りコスモスにはたった2つだけの事物しかないのであるだろう。この択一は同じ水準の実在の諸存在をもたず、ただ異なる順序の諸存在だけがある。それはa Oneなしの純粹のa Many (a sheer many) のみを持つ。そして、そのa Oneとその行為のあいだの区別を前提とする。したがって、始めも終わりも

一の行為

- 単一の行為-----段階的波及=水準の相違=異なる順序の諸存在=純粹の多
- or
- 複数の行為-----多の発生前に複数性を持つ

図19. 「一」と「行為」からなる多の矛盾

図20. 自己否定的一は2つの役割をもつゆえに最初から多である

図21. 神の不必要か、神の世界創造の否定

a Manyのみがあることになる (図19) .

- (5) a Manyを生じる以前のa Oneはa Manyの起源となる時のa Oneとは違う。しかし、そうすると、a Manyが生みだされる前に、多くの一 (Many ones) があることになる。だがもしa Manyの発生がそのa Oneのまさに本質であったとしたら、そして即座にそのa Manyを生むならば、そこには自己否定 (self-diremption: 自己が離脱して再び空になる) の行為はないであろう。a Manyと常に直面したa Oneは、そのa Manyを要請しているといってよかったと思われるが、しかしそれを発生したとはいえない。そして最初に単なるa Oneの存在であり、それからその他の凡てのものを発生する源泉となるということもいえないであろう。自己否定的なa Oneはa Manyの源泉であるばかりでなく、それを包括しつづけなければならないが、それは2つの役割をもたなければならないのであり、かくして、その最初からそれ自身がa Manyでなければならないのである (図20)。

- (6) 発生されたa Manyは、そのa Oneから離脱 (thrust away) されるか、あるいは、そののなかに閉じ込められるかである。もし前者なら、そのa Manyとa Oneはより大きなa Manyを形成し、それはそれを包み込むよ

り大きなa Oneを必要とする。もし後者ならば、本当のa Many, すなわちa Oneの媒介によって集められたあるいは連結されたa Manyは存在しない。ただa Oneしか存在しない (図21) 。

以上の検討からワイズは次のように結論する。
「a Oneとa Manyの問題は、一方から出発しそれから他方に至ろうとするいかなる説明によっても解決を望むことができない。」⁶⁰⁾

4.2.4 二元論 (dualism) 批判

ワイズによれば、大部分の思想家はおそらく多元論者で、大部分はその思考や著作を多数の事項 (items) で締めくくり、それらを、潜在的にあるいは明白に分離し、不還元で、単に互いに対立するものであると認めるのだが、二元論者とはたった2つの事項に限定する多元論者であるとされる。その内の一方は、多元である。二元論者にとっては平板にかつ結論的に1つのa Oneと1つのa Manyが問題の終点になる。どちらも他方を発生せず、どちらも他方を基礎づけず、どちらも他方を所有しない。この理論の長所は、どちらの事項の価値あるいは意味をも最小化することを拒否するところにあるという。ワイズはこの理論の代表者としてアリストテレスを上げる。あらゆるタイプの二元論を打倒することが最初の目的の1つであったけれど

も、おそらくアリストテレスは一貫した二元論者であるとみられるべきであろうという。ことに彼が神と自然、活動的理性 (the active reason) と人間的理性 (the human reason)、形相と質料、実体と偶然についての見解を対照することで説明をする場合にそうであるという。またデカルトを、意図的にアリストテレス的な外観に対立するように自分自身を方向づけたがアリストテレス的な見解を定義する基本的二元論を克服することなしにそうした、と批判する。ワイスは二元論の4つの難点を上げる。

(1) 二元論はそのうちの1つ、つまり a Many に荷担するが、結局は a One が必要とされると白状するという。その理由は a One は a Many の必然関連 (necessary correlate) であるからで、a Many には決して還元されるべきではなく、あるいは a Many と平行して位置づけられるべきではないとするからであるという (図22)。

図22. 一と多の必要性の矛盾

(2) a One and a Many は1ペアをなすが、なんらかの仕方と一緒にあらねばならず、したがって a One の支配下であらせよということになる。その a One は a Many とペアとなる a One とは区別され、また区別されなければならない。かくして二元論は際限なく増殖しなければならない (図23)。

(3) ペアを形成するには、a One と a Many は関連しなければならない。その関係は最初の a One でもなければ最初の a Many でもない。それは第3の事項であり、それをなんとかして仮定上の起源で凡てを尽くしたペアとペアにされなければならない。もう一度二元論は終わり無く増殖する (図24)。

図23. 二元論の無限増殖

図24. 一と多とそれらの関係という3つの存在：二元論は三元論である

(4) 二元論によっては2つの同等の究極事項を持つ。もしそれが無限の新事項のペアーの生産を避けようとするれば、始めの事項より以上の何物も認識することを拒否しなければならない。これらは不還元的で、究極で、無関連であると考えられなければならない。しかしその時、それらの一方を知り、あるいは把握し、あるいは知り合いになることは他方から切り離されることである。そうすると、いかにして二元の半分を知ったり持ったりすることが他方を知ることを可能にするのか、そして我々が他方を知らなかったり、持たなかったりするならば、どんな保証が、我々が始めに用いた起源の側より以外の何かが存在すると想定することに対して、あるのか。二元論者は彼の2つの事項を知るためには、なんらかの方法で両方の上に、あるいはなかにいなければならない、そしてどちらにせよ、彼がもともと満足していようと試みたところの事項の他の追加的な何かを認識しなければならない。かくして二元論ではなくなる(図25)。

以上が二元論の難点である⁶¹⁾。

4.2.5 相違のなかの同一性 (Identity in difference) 理論の批判

相違のなかの同一性は究極の事項がある意味

図25. 同等性を持つ独立な二元の不活性と第三の認識者の必要

で同一であるという理論である。a Oneはa Manyであり、a Manyはa Oneであるとする。2つの構成要素のそれぞれが完全な実在性を得るまえに他を必要とするとみられる。その他者は実際もう一方の側からみたそれ自身である。2つの側は、一緒になった時、つまり2つであるにもかかわらず1つになった時、その時にのみ実在を構成する。a Manyで出発してそれはa Oneを認識するが、しかしそのa Manyに加えられるべきもう1つの事項としてではない。a Oneで出発する時、それはa Manyを認識するが、しかし、そのa Oneから発生されたり、それと対立するさらなる実在としてではない(図26)。この見解の大家はヘーゲルであるという⁶²⁾。

ワイズによればヘーゲル学派のだれもa One

図26. 相違のなかの同一性の基本的概念

をa Manyよりも重要視する傾向があるという。彼等は、a Oneがそれ自身をa Manyとして外化し (exteriorize), そしてしかもa Manyを所有し続ける, つまりそのa Manyと自身を同定しながらそこからそれ自身を分化すると述べるという。わずかにa Manyの側の同様な功績を説く言明がみられるが、全体としてa Manyはa Oneの産物であると取られており、実在と意味においてa Oneとされる。しかし、ワイスからみれば、a Manyを、a Oneに対するのと同じように重要視する見解のみが相違のなかの同一性の主題を正當に扱うはずであるが、このような正當な扱いはこの学派の欲求を阻害するであろうという。なぜなら、異質な事項からなる世界から単一の絶対的な世界への運動、つまりそこに存在するa Manyがなんらかの仕方で吸収される世界へと動かしたいという欲求を阻害するからである。この理論を大胆にとるならば、二元論者の主張に特徴的な困惑に陥らないように調停するようにみえる。それはa Oneとa Manyに平等の地位を認めるが、それらを互いに切り離さない。相手を独立させながら保持し続ける。a Oneがa Manyと共にあるということは、相手を保持する、つまり、相手と切り離されるのではなくて、相手を持つことである。

ワイスはこの理論に3つの難点を指摘する。

- (1) この同一性がその差異と同一なのか異なるのか明確でない。もし差異が同一性と同じなら全くの同一性以外には何物もない。もし同一性が差異とは異なるなら、最初の相違のなかの同一性の内部にはっきりした二元論を持つことになる (図27)。
- (2) それぞれの基本的実在は他方を持つ、つまりそれは他方と同定できると想像される。しかしそうすると、相違のなかの同一性は1つの他を持つに違いない。基本的実在は結果的に、相違のなかの同一性として表現されるのではなくてむしろ相違のなかの同一性が相違のなかの同一性によってその他者と連結されるとして表現されるであろう。この最後は順にそれ自身の他者を必要とするだろう、そして次々に拡大する (図28)。
- (3) もしa Oneがなんらかの意味においてa Manyの他者であるとすれば、それはa Manyがもたないなんらかの特徴を持たなければならないか、あるいは、a Manyが持つ特徴を欠いていなければならない。もしこれ

図28. 他者の無限要請

図29. 同一性の不成立あるいは無限の新実体の要請へ

でないなら、我々は単なるa Oneか単なるa Many以上は何ももたない。だが、もしa Oneとa Manyが純粋に区別されるのであれば、両方の認識は不可避免にもう1つの実体 (entity), もう1つのa One, 両方のためのa Oneの認識へと導くだろう。これは、元のa Oneとa Manyとは違うので、もう1つのa Oneの認識を要請するだろう。そして次々に拡大する (図29)⁶³⁾。

5. まとめ

本論稿においては、ワイスの多元論的基底について、その問題成立の過程が明らかにされた。序論においては、先行研究の検討がなされ、ワイスの多元論が一と多の問題を中心として成立してきたことが示唆された。「2. MBの概観」においてはテキストの構成とワイスのMBにおける哲学的特徴が概観され、人間における完全への希求あるいは善への義務づけとその必然的な失敗のパラドックスが問題探求の基底に横たわっており、それが多元論の立場へと導くことが明らかにされた。「3. 様態の概念」においては、様態の概念が検討され、解釈された。それはスピノザに発するこの概念の検討の結果得られた多元論的図式を持つと解釈された。そして「4. 一と多の問題と過去の理論の批判」において一と多の問題についてのこれまでの代表

的哲学者による解決案が批判され、ワイスの問題解決が迫られてくることが明らかにされた。この解決については、第2部の研究において吟味される。

英文摘要

In this paper, Paul Weiss's formation of the One and Many Problem and his criticisms of the precedent studies were examined. In the first chapter, present author summarized precedent studies on Weiss's philosophy and suggested that the One and Many Problem has been the central topic of his pluralistic philosophy. In chapter 2, the contents and philosophical characteristics of the *Modes of Being* by Weiss was overviewed. The paradox between the man's obligation to be complete and its necessary fault lay in his quest of the problem and it had led him to pluralistic standpoint. In chapter 3, the Concepts of Modes was interpreted. After overviews of several philosophers' Concepts of Modes from Spinoza, it was deduced that Weiss had produced an unique Concept of Modes of pluralistic schema. And in chapter 4, it was interpreted that Weiss's tasks had been coming up through his criticisms to the problem-solving by precedent authors. Weiss's problem-solving will be interpreted in

the Part II of this study.

注および引用・参考文献

- 1) Weiss, P. *Modes of Being*, Southern Illinois University Press, 1958.
- 2) Krettek, T. "Introduction" in Krettek, T. *Creativity and Common Sense: Essays in Honor of Paul Weiss*, State University of New York Press, 1987. p. 2.
- 3) Plochmann, G. K. "Methods and Modes" in Krettek, T. *Creativity and Common Sense : Essays in Honor of Paul Weiss*, pp.19-20.
- 4) *ibid.* p. 26.
- 5) *ibid.* p. 42.
- 6) Miller, P. "Substantial Process Philosophy Speculative Common Sense" in Krettek, T. *Creativity and Common Sense: Essays in Honor of Paul Weiss*, p. 77.
- 7) Neville, R. C. "Achievement, Value and Structure" in Krettek, T. *Creativity and Common Sense : Essays in Honor of Paul Weiss*, p. 124.
- 8) Bernstein, R. J. "Human Beings : Plurality and Togetherness" in Krettek, T. *Creativity and Common Sense : Essays in Honor of Paul Weiss*, p. 200.
- 9) ハイデッガー, 大江精三訳, 同一性と差異性, 理想社, 1960.
- 10) 体育界では, E. F. ジーグラーがこの概念を用いて体育の概念を検討し体育の概念がfamily resemblanceであると主張している.
- 11) Bernstein, *ibid.* pp. 200-217.
- 12) 「データ」という言葉はワイスの用語である. 本論文の第2部に詳しくは出現するが, 例えば, ある存在が人によって捉えられる場合, その存在を丸ごと捉えられず, データとして与えられるものによって捉えるというような文脈で使用される.
- 13) Weiss, *Modes of Being*, p. 4.
- 14) *ibid.* p. 5.
- 15) *ibid.* p. 6.
- 16) *ibid.* p. 6.
- 17) *ibid.* p. 6.
- 18) *ibid.* p. 7.
- 19) *ibid.* p. 7.
- 20) *ibid.* p. 8.
- 21) Weiss, P. *Reality*, Princeton University Press, 1938. の序論部参照.
- 22) Weiss, *Modes of Being*, p. 11.
- 23) *ibid.* p. 10.
- 24) *ibid.* p. 10 f.
- 25) *ibid.* p. 11.
- 26) おそらくワイスがこの箇所を考えていたのは, ピレボス (プラトン, 田中美知太郎訳, プラトン全集 4, 岩波書店, 1975. pp. 193-194.) であろう. 訳者の注 (p. 193. 注の 4) では善の条件が 3 つに整理されている. アリストテレスへの影響にも言及している.
- 27) Weiss, *Modes of Being*, p. 12.
- 28) *ibid.* p. 12.
- 29) Weiss, P. *Nature and Man*, Henry Holt and Company, 1947.
- 30) この著作の内容は第 1 部が因果と自由で, 原因と予言, 自由と過程, 存在の性質, 行為と自発性が論じられている. 第 2 部は, 精神と自己で, 生物の知恵, 意識, 人の人間性, 技術と習慣, サインと言語, 心の性質, 意志, 自己がそれぞれ論じられている. そして最後の節は「人間の課題」で締めくくられている.
- 31) Weiss, *Modes of Being*, p. 12.
- 32) *ibid.* p. 12.
- 33) Weiss, P. *Man's Freedom*, Southern Illinois University Press, 1950.
- 34) Weiss, *Modes of Being*, p. 13.
- 35) ワイスが無神論者であることに注意しておかなければならない. 後の著作では, 神は統合 (Unity) と読み替えられ, 基本的な 4 次元構造が変化していく.
- 36) Weiss, *Modes of Being*, pp. 14-17.
- 37) *ibid.* p. 16.
- 38) adumbration の概念は, indication および

contemplationの概念と組になって知覚を説明する。indicationは対象が我々に与えるもの、例えば、映像である。これに対してcontemplationは我々が身体内に構成する判断である。そして, adumbrationは対象の本質を捉える働きであると一応いえると思われる。

39) Weiss, *Modes of Being*, p. 17.

40) *ibid.* p. 17.

41) 小学館(編), ランダムハウス英和辞典, 小学館, 1979.

42) 新村 出(編), 広辞苑, 岩波書店, 1976.

43) 下中邦彦(編), 哲学事典, 平凡社, 1971.

44) 桂 寿一, スピノザの哲学, 東京大学出版会, 1956. pp. 148-149.

45) 下中, 哲学事典.

46) Weiss, *Reality*, pp. 170-171.

47) 存在の様態間の関係の仕方. Weiss, *Modes of Being*, pp. 88-89. の内容を概括すると,

①Actualityと他の実在についてThe law of contradictionが作用する。

矛盾の法則「すべてのXについて、XでないXは存在しない: for every X, X is not non-X」を基本範疇が具体化する。

これは論理学上の記号論理学における矛盾の法則ではなく、さらに根本的な意味における究極的な、存在論上にもあてはまる法則であると区別されている。

②Idealityと他の実在についてThe law of excluded middleが作用する。

排中律が最も適切；古典論理学においては、この原理は「AはBでもなく、また、Bでないものでもないということはない」という形で表わされる。すなわち、あるものBとその否定non-Bとの間に第3の中間的なものの存在を許さないことを示すのがこの原理である。同一律、矛盾律とともに古典論理の三大原理の1つと称される。

記号論理学では命題論理のトートロジー $PV \sim P$ を指す。また、命題の真理値として、真と偽の2つのみを認め、その他の第3の真理値を認めないという主張を示すものと解釈されることもある。が、ブラウアーは数学的直観主義の立場からこの原理の一

般妥当性を否定し、さらにハイティングは排中律を含まないような命題論理の公理体系を構成した（下中, 哲学事典, による）。

③Existenceと他の実在についてThe law of inferenceが作用する。

推論の法則が適切；前提と結論との間になりたつ論理形式にもとづく論理的推理を指すものと思われる。

④Godと他の実在についてThe law of identityが作用する。

自同律「AはAである」、記号論理学では、PならばP, あるいは $P \equiv P$ 。

48) プラトン, 田中美知太郎訳, プラトン全集3, ソピステス, 岩波書店, 1976. pp. 84-93. 参照.

49) 大文字でa Manyと書かれる場合は存在そのものをさし、a manyと小文字で書かれる場合は、存在から観察されたデータを指すという区別が全体を通してなされている。Xとx, あるいはYとy, その他がある。

50) Weiss, *Modes of Being*, p. 501.

51) *ibid.* p. 501.

52) カントの総合の考え方を知るためにその著作から一部を引用する。「実体的合成体においては、分析が全体でない部分すなわち単純なものによってのみ終わるように、総合は部分でない全体すなわち世界によってのみ終わる」（カント全集第3巻前期批判論集(2)所収、可感界と可想界との形式と原理、1770. p. 217.）。このことは多から出発して一で終わるというように解釈されうる。「数学はそのすべての定義に総合的に到達するが、哲学は分析的に到達する」（自然神学と道徳の原則の判明性、1764. p. 76.）。ここでは総合が数学に特徴的な方法であることが述べられている。例えば、足し算は、多項から1つの答えを出す。プロレゴメナ(1783)では算術と幾何学について「・・・直観によってのみ総合は可能となるのである」（カント全集第6巻, pp. 216-217.）と述べて総合と直観の関係を指摘する。また、知覚について「ア・ポステリオリな総合的命題、すなわち、経験から汲みとられる総合的命題の可能性もまた、なんら特別の説明を必要としない。

なぜなら、経験自体が、知覚の連続的な結合（総合）にはかならないからである。それゆえ、私たちに残されているのは、ア・プリオリな総合的命題だけであって、その可能性が求められるか、あるいは究められるかされなければならない。」（同上書、p. 226.）「いかにしてア・プリオリな総合的命題は可能であるか？」（同上書、p. 230.）と哲学者たちに挑戦する。そして、「この解答こそが、彼らが純粋理性の名のもとに私たちに何かを申し出なければならぬ場合に、彼らの示さなければならなかった信用状であるからである。」（同上書、p. 230.）という。それに対するカントの答えは「すべてのア・プリオリな総合的原則は、可能的経験の原理にかならない・・・ただ、経験の対象としての現象にのみ関係させられることができる。」（同上書、p. 283.）であり、また「対象の直観のための感受性としての感官の形式的性質のなかにあるこうした主観的なものは、それだけがア・プリオリに、つまりすべての知覚に先行して直観をア・プリオリに可能ならしめるものである。そしてこうなるとア・プリオリな直観およびア・プリオリな総合判断の可能性は、直観の側から十分理解されるのである」形而上学の進歩に関する懸賞論文、同上書、p. 241.）であり、「総合的判断とは、述語が主語の概念のなかで全然考えられていなかったようなあるものをふくむことによって、その述語が主語の概念を超えてゆくような判断である」（形而上学の進歩に関する懸賞論文、同上書、p. 324.）などである。

53) Weiss, *Modes of Being*, p. 502.

54) *ibid.* p. 503.

55) *ibid.* p. 503.

56) *ibid.* p. 503.

57) 「人間〔元来、自由を愛し、他人を支配することを楽しむもの〕が、あのような拘束〔そのなかで生きているのをコモンウェルスのなかで私たちはみている〕を持ちこみ、それをみずからのうえに課しているその究極の理由、目的、そして意図は何であるのか。それは自己保存と、それがもたらす満足のゆく生活への洞察に発している。」ホッブス、永井道雄・

宗片邦義訳、リヴァイアサン、世界の名著28：ホッブス、中央公論社、1979. p. 192.

これから自己保存と洞察が共起の契機であると読みとることが可能である。

58) Weiss, *Modes of Being*, pp. 503-505.

59) 「プロティノスは、古代哲学最後の、そしてまた西洋の哲学の歴史全体を通じて、たぐい稀な独創的思想家であって、・・・自分の体験とプラトンの「イデア」の説とにもとづいて、万物がどうして根源から出て、また根源にかえるかを説明しようとした。・・・万物がこの「一者」が溢出し、流出したものであると説く。・・・物理的必然を倫理的必然によってコントロールすることこそ、真に人間にとってふさわしい自由であり、靈魂が身体の束縛を脱してその本源にかえることこそ、人間にとっての最高目的である。それでは、この最高目的はどうして到達されるかというに、まず禁欲の生活に精進するとともに、理性的思惟に専念することによってプシケを浄化して、ヌースの段階にのぼり、そこでイデアの直観にあずかることが必要である。・・・」服部英次郎、西洋古代中世哲学史、ミネルヴァ書房、1976. pp. 160-162.

ここには身体の否定の思想がみられ、身体についてのワイスの見解とは対照的である。

60) Weiss, *Modes of Being*, p. 506.

61) *ibid.* pp. 506-508.

62) ヘーゲル、武市健人訳、改訳大論理学 上巻の1、ヘーゲル全集 6 a、岩波書店、1956. p. 198 f. で一者と多者の問題が論じられている。ワイスの議論と類似したところがあるので、ワイスはヘーゲルを意識しているといえよう。しかし、先に述べたように、ヘーゲルと大いに似ているとともに、大いに異なっているという評があることを確認しておく。例えば、ヘーゲルが反撥と牽引という言葉を用いて存在者間の関係に言及しているが、ワイスの連帯性の概念を構成する対立と協調という概念と共通点がみられる。

63) Weiss, *Modes of Being*, pp. 508-509.

1990年4月1日採録